毎日新聞（夕刊）

「やさしさ」のネットワーキングへ

ミーイズム状況の克服を

政治社会学者・栗原彬氏に聞く

官僚批判にみられるように、戦後日本の社会システムが揺らいでいる。イデオロギー対立の時代が去り、大量の情報と消費の欲望が交錯する中で、寄る辺を失った「個」は今、他者との関係の回復を渇望しているようだ。「やさしさ」をキーワードに社会の共同性を探求し続け、刊行中の『講座 差別の社会学』（全4巻、弘文堂）の編者を務める政治社会学者の栗原彬さんに、「共生」と「差別」について聞いた。【大井 浩一】

くりはら・あきら　立教大教授。1936年生まれ。東大大学院博士課程単位取得退学。著書に『やさしさのゆくえ』『政治のフォークロア』など。

――「やさしさ」とは？

16年前に『やさしさのゆくえ＝現代青年論』（筑摩書房）を出した時は、若者が「やさしさ」を、とりわけ権力との関係の中で言い始めていました。学園闘争には、高度成長の中で失われてきた人間的な共同性への思いもあった。コミューン志向を全共闘世代、団塊の世代の人たちが大事に抱え、それが1980年代のさまざまな市民活動、ネットワークに結び付いた。その核心は「やさしさ」としか言いようのないものです。それが人間関係を結び直していくキー・タームになった。

――最近出版された『〈やさしさ〉の闘い』（新曜社）では、「やさしさ」をめぐる状況は変わったのでしょうか。

今の市民活動は、これまでの組織論とは随分違う。ネットワークとして本当にやりたい人たちが集まって、しかも言い出しっぺが責任を持ってやるという自由な集まりです。

例えば障害者自立の運動や高齢者のケアの活動など地域の活動で大事な役割を果たしていて、中心が団塊の世代だったりする。その市民活動の中核は別な意味で「やさしさ」だと思う。「やさしさ」が、形を変えて大人の「やさしさ」になっている。

――大人の「やさしさ」？

例えば、山形県高畠町の有機農業の里にいる人たちの「やさしさ」は、高度産業社会が構造的にぶつけてくるものに抗い、内側にいながらそれを組み替えていくやり方です。町が農薬の空中散布をやっていて、旗の色で空中散布が必要なところと不要なところを示すんですが「必要」の旗がだんだん少なくなって、ついに町が散布中止を言い出した。単純な反対運動ではない。結局、「やさしさ」とは命への極限的な感受性です。時代とともに「やさしさ」の意味が、「他の命へのやさしさ」まで深まっていった。

――が、一方には、自己に閉じこもりがちな人々もいます。

世界的な文化状況の中では「欲望の自己回帰」という現象がある。欲望が、自分のエゴにひたすら向かっていく非常に狭いミーイズムの状態。その典型が、青山学院大生を若い男女が殺した事件です。お金がなくなって、知人のアパートの隣の学生を殺した彼らは、「人を殺して何とも思わないのか」と問かれ「知らない人ですから」と答えたという。しかし、他者の存在を認めないところにアイデンティティーはあり得ない。異なる他者と自分との間に一つの関係を見つけていく時に、アイデンティティーができる。今は、アイデンティティーがゆくえを見失っている時代です。

――非常に怪しい感じです。

こうしたアイデンティティーの漂流状態では、例えば、オウムみたいなものに身を預けることも生まれる。またナショナリズム、国家意識と結び付くこともある。その時は、「自虐的な歴史観」などと今までの歴史を批判する視点が出てくる。アイデンティティーを託すに足る集団に理想的な像を見つけていくことになる。しかし、一つのアイデンティティーに固執していいのか。今、社会が複雑で、人は多面的な関係を取り結んでいるから、例えば、日本なら日本という単一なところに飛び移るのでなく、人間として、とか、アジアの一員として、という、もっと複合的なアイデンティティーのありようがあると思う。

――そこで必要なのが「ネットワーキング」＝「共生」で、その前提として「差別」を知ることが必要になる――と。

固定化されたネットワークでなく、一人一人の行動としてのネットワーク、それがネットワーキングです。伝統的な差別は、常に新しい社会的な意味を担っているからこそ継続される。しかも、私自身の中でも日々差別の瞬間は起こっては消えしている。それが反復する時に制度化されていく。差別も「ing」形です。『講座 差別の社会学』では、構造的に考えると同時に、構造を担っている身体、行為、思考様式という視点でとらえています。それによって、差別を一人一人の問題に投げ返すことができる。差別の問題を明らかにし、超えていく先に、はじめて共生が言える。しかも、同化するのではなくて、それぞれが自律的でありながらコミュニケーションを作ろうという努力があってはじめて共生と言えるのです。